

韓国カジノ視察 報告書

視察日：2019年10月17日(木)～19日(土)

日本共産党横浜市会議員団



目次

視察行程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2
①パラダイスシティ・カジノ視察・・・・・・・・	3
②チョンニャンニ（清涼里）駅でのシールアンケート	4
③江原ランドがあるサブク駅周辺の調査・・・・・・・・	4
④ギャンブル中毒者救援活動を行っているパン・ウンゲン牧師からヒアリング	5
⑤「3・3記念財団」ヨ・ポンギョ事務局長からヒアリング	6
⑥江原ランド・カジノ視察・・・・・・・・・・・・・・・・	8
⑦江原ランド営業時間終了時の町の調査・・・・・・・・	9
参加議員の報告・・・・・・・・・・・・・・・・	10

【日本共産党横浜市議団の参加者】

古谷やすひこ副団長（鶴見区選出） 北谷まり議員（保土ケ谷区選出）
政務活動員1人（柏木耕史）

本視察は、韓国環境情報センター/韓国スタディツアーの田中博氏がコーディネートした「韓国カジノ問題現地視察」に参加する形式をとった。事前に、党市議団のカジノに対する問題意識や市会での態度を示し、最新のIR型カジノの現況や、自国民が入れる江原ランドカジノの周辺で起きていることなどを視察したいという要望を伝え、ツアー内容に反映してもらった。



左から古谷やすひこ副団長、北谷まり市議、同行した上野たつや県議、田中氏
10月17日 韓国キンポ空港にて

【視察行程】

■10月17日(木)

- 12:00 羽田空港発
15:00 キンポ（金浦）空港着
16:00 インチョン（仁川）空港到着 ①パラダイス・カジノ視察 ソウル市内で宿泊

■10月18日（金）

- 8:00 ホテル発
8:30 チョンニャンニ（清涼里）駅②シールアンケート実施
9:30 チョンニャンニ駅出発 江原ランドへ
13:10 サブク駅到着 ③周辺調査
13:30 ④ギャンブル中毒者救援事業を行っているパン・ウングン牧師からヒアリング
16:00 ⑤江原ランド入り口にある「3・3記念財団」のヨ・ボンギョ事務局長からヒアリング
19:30 ⑥江原ランド・カジノ視察 サブク駅周辺のホテルで宿泊

■10月19日（土）

- 5:30 ⑦江原ランド営業終了時間の人の流れとサブク駅周辺の調査
10:35 サブク駅出発
13:55 ソウルの清涼里駅到着
19:50 キンポ空港出発 帰国



①パラダイス・カジノ視察

到着ロビーで 最初に目にするカジノ看板

キンポ（金浦）空港の到着ロビーでまず目に入るのは、パラダイス・カジノの看板。空港のいたるところで目にする。このカジノ施設は、面積 15,529 平方メートルで韓国最大級、24 時間営業の外国人専用カジノ。北東アジア初の IR を謳っている。キンポ空港からインチョン（仁川）空港駅に移動し、無料のモノレールに乗り込み、パラダイス・カジノが入るパラダイス・シティに到着。

人少ないショッピングモール

施設に入ると、広い室内空間にでる。IR 構成施設の一つであるショッピングモールの中心部とのことだが、人はまばらだった。

ATM 完備 アジア系の客

ショッピングモールの奥に、赤や紫に光る入り口があり、そこを抜けるとホテルとカジノの入り口に到着。カジノの入り口には韓国語で「外国人専用」と書かれた看板があった。入り口ではパスポートのチェックが行われる。入場料は無料。年齢制限は 19 歳以上。施設内の撮影は一切不可。施設内の設備は、スロットマシーンと、ルーレットやカードなどを扱う「テーブル」が半分づつという印象。ATM や両替機も完備していた。客層は、アジア系で年配者が目立った。フォーマルではなくカジュアルな服装の人が多かった。



空港の到着ロビーにあるカジノの看板



画像出典：WBF

北東アジア初の IR と謳うパラダイスカジノ



人がまばらな IR 内のショッピングモール



パラダイス・カジノの入り口

②シールアンケート

ソウルから電車で数駅の場所にあるチョンニャンニ（清涼里）駅で、シールアンケートを実施。実施時間は約30分。14人が対応。同駅は江原ランド行き列車の始発駅です

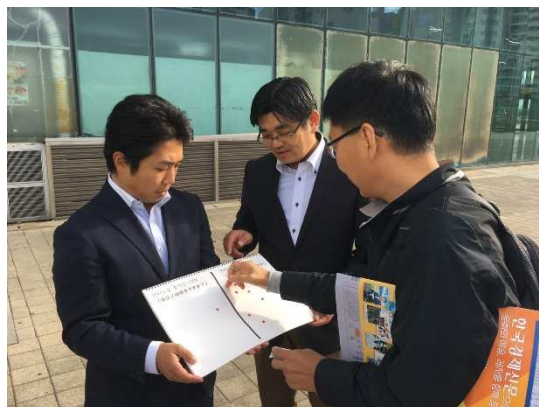
【設問とシール数】

カジノは嫌いですか 14

カジノは好きですか 1

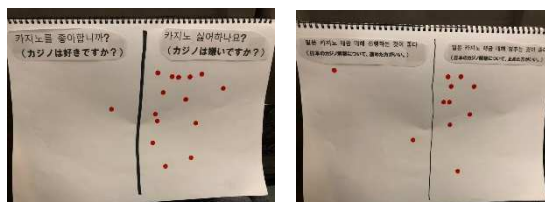
日本のカジノ解禁 進めた方がよい 2

日本のカジノ解禁 止めたほうがよい 9



シールアンケートを実施

特徴的だったのは、高校生ぐらいの若い方から年配の方まで、迷いなくカジノは嫌いにシール貼っていった。日本にもよく出張するという男性は、「カジノは問題ある。財産をすべて失った人などの不幸なニュースを聞く。止めた方がよい」と語った。



③江原ランドがあるサブク駅周辺の調査

駅を出ると目に入ったのが 金貸しの看板

チョンニャンニ駅から約4時間後、韓国で唯一自国民の入れる江原ランド・カジノがあるサブク（舎北）駅に到着。駅を出るとまず目に入ったのが「身分証明書があれば、お金をかします。300～1000万ウォン」「スマホを持っていれば（料金延滞していても）50～100万ウォンかします」と掲げられたカー看板だった。駅周辺は、直径約1000メートル程度の小さな町だが、派手な色の看板とネオンが目立つホテルがいくつも建並んでいる。視界



「お金貸します」と書かれたカー看板



サブク駅周辺 赤い質屋の看板が目立つ

には、質屋と金貸しの看板が入る。町のメイン通りには、半裸の女性が描かれた風俗店の看板も目立った。道の手すりなどにも金貸しの名刺チラシがあちこちに貼ってあった。コーディネーターの田中氏は「この町の全ホテルで自殺者がでている」と説明。また、ホテルなどの建物のオーナーはソウルに住む資産家が多く、この地域の人か経営していないとのこと。

朝しか営業しない飲食店も

飲食店の数は数えるほどしかないが、一番繁盛する時間は、江原ランドの営業終了後の朝6時の時間帯。この時間しか開けない店もあるとのこと。昼食をとった店の店主に「カジノができてよかったですか」と尋ねたら、「どうなんだろうね。昔からこの住んでいた人達は、いなくなってしまったからね」と顔を曇らせた。

質に入れられた車がならぶ道

江原ランドの山道入り口付近の道路、広場には高級車がズラリと停めてある。田中氏の調査では、車のほとんどが質流れ品とのこと。



道の手すりや柱に貼られた金貸しの名刺広告



質流れの車がならぶ道



江原ランドに続く山道の入り口 ピンクのカー看板は「ゴルフバックでお金貸します」

④ギャンブル中毒者救援事業を行っている パン・ウンゲン牧師からヒアリング

ヒアリング時間 約2時間

パン・ウンゲン牧師（コハン南部教会）は2000年に江原ランドが開業した時から、「賭博は人をダメにする」と訴え、ギャンブル依存症の方の支援を続けてきた。江原ランドの入り口に車（バン）を止め、車内で相談活動や簡単な軽食提供を行っている。車のフロン



左から3人目 パン牧師

トガラスやサイドには「カジノは詐欺」と書かれた横断幕が掲げられている。

Q) どんな支援活動をしてきたのですか？

A) 最初の方は、ホームレスになってしまった人へ食事提供など。帰りの切符も無くなってしまった人に切符を買ってからあげたりもした。しかし資金が尽き、現在は相談活動が中心。「カジノは詐欺」と書いたプラカードを帽子に貼って、カジノ内に入りアピール活動をしている。

Q) カジノができて、地域はどうなりましたか？

A: カジノができてから、約 2400 人もの自殺が出た。カジノは人々の精神を病むものだ と確信している。こんなところで、子どもたちが健全に育つわけがない。子育て世代の多くは引っ越していったか、子どもだけは別の地域に移した。

Q) カジノが IR 型カジノになって、訪れる人は変わりましたか？

A) スキー場やゴルフ場などカジノ以外の施設ができたが、そこに来た人も、結局はカジノに引き寄せられる。そのままハマってしまう人々を見てきた。

Q) カジノができて、住民は豊かになりましたか？福祉が充実したとか。

A) 子ども達は、別の地域に移ってる。勉強できる環境じゃない。人口も減っている。地域として税収は増えたが、それは地域振興として還元されていない。

Q) 行政の依存症などの対策は？

A) 機能していないと思う。むしろ再び賭博をやれるようにしているように見える。数時間相談を受け、それで指導したこととなり、またカジノに入っていく。



支援拠点の車の中でヒアリング



説明するパン牧師

Q) カジノ周辺の住民は、カジノがもたらす弊害を知っているが、しょうがないと思っているのでしょうか。

A) 思っている。しかしこの地域はカジノ以外に何も無いという圧迫感があって、仕方ないと感じている人が多い。

Q) 支援活動の中で、印象的だったことを教えてください。

A) 100 万ウォン（約 10 万円）の束を丸めて輪ゴムでしばり、大事そうに握っている人が来た。「このお金は聖なるお金で、1 ウォンも手を付けない。出銭は験（げん）が悪い。」と言って、支援センターで無料の食事提供を受けて、カジノ向かった。カジノ客はカジノ以外ではお金を使わなくなる。

⑤「3・3記念財団」

ヨ・ポンギョ事務局長からヒアリング

ヒアリング時間 約2時間

Q)「3・3記念財団」について教えてください。

A) この地域は、もともと炭鉱で栄えた町。地域の構成も単純なものだった。炭鉱で働く労働者とその人たちを支える産業しかなかった。しかし時代の波で、80年代に廃鉱が決まり、職を失う住民達が「私たちの生存権を保障しろ」と運動が起きた。そして95年の3月3日に、政府と住民の間で「炭鉱に代わる新しい産業を誘致する」という合意がされ、そのための特別法をつくことが決まった。その後、住民運動のセンターだった団体が記念財団として結成された。それが3.3記念財団の始まり。現在はギャンブル依存症の回復プログラムや、地域への啓発活動など行っている。

Q) 最初からカジノを誘致することを決めていたのでしょうか。

A) 決めていない。炭鉱に代わる新しい産業を国の責任で誘致することが特別法の中身。政府の調査が始まり、様々な提案があったが、この地域の山岳地帯という土地柄、交通網などを考慮すると、どれも成功する可能性が少なかった。そこで、カジノ案が出てきた。議論の末、カジノをつくることで合意した。

Q) 最初のカジノ案はどうだったのですか。

A) 最初は、国内外の民間企業が興味を示した。いくつかの事業提案がされた。しかし、97年に国際通貨危機があり、民間の投資による整備は難しくなった。そこで、98年に51%を政府が出資する江原ランド株式会社が創



説明を聞く視察参加者



右、ヨ・ポンギョ事務局長

設され、カジノ建設が本格化していった。2000年に、現在の施設に比べるとごく小さなカジノが建設された。これが江原ランドの始まり。莫大な利益があがり、その利益を使って、他の様々な施設やカジノ施設の拡張が行われ、現在に至る。カジノはテーブル数で言うと、2000年当時から3倍以上になった。今では利益は年に約1兆ウォン(約1000億円)、利益の90%がカジノ利益由来のもの。当財団の運営費も江原ランドから出ている。

Q) カジノができたことで、町はどうなりましたか。

A) 一番特徴的なのは、詐欺や窃盗、ひったくりなどの犯罪が増加した。闇賭博も増えた。特に高校生以下の犯罪は、全国平均の3倍以上に跳ね上がった。学力も低く、教育環境は劣悪だと言える。人口も減り続けている。自殺者も多くでた。

Q) 福祉や医療などは豊かになりましたか。

A) そもそも江原ランドは、雇用の確保が最大の目的。現在の施設の従業員約 3500 人のうち、60%が周辺地域の人で占められている。道路などの整備は進んだ。

Q) カジノの弊害と対策についてどんな議論があったのですか。

A) 十分とは言えない。私たちは地域経済の解決ができれば良いと思っていた。カジノができて、様々な問題が起きるなんて想像もできなかった。カジノの影響は、環境、教育、

犯罪と地域のあらゆる分野で、蜘蛛の巣のように絡み合っている。

Q) 今後は、カジノをやめるという選択肢はないのでしょうか。

A) カジノに代わる産業がない。対案がない以上、起きている弊害を少しでも減らし、健全に運営できるようにすることしかない。

Q) 日本でのカジノ解禁について、どう思いますか。

A) 例えば、ソウルのような大都市で、自国民も入れるカジノの建設は絶対にやめた方がよい。政府も許さないだろう。この町は、とても小さいから何が起きているのか見えやすい。しかし都会では、問題が見えなくなってしまう。対策もとれないだろう。どんなことが起きるのか想像もできない。

⑥江原ランド・カジノ視察

視察時間、約 40 分

江原ランドカジノはサブク駅から車で約 5 分の山の上にある。派手なイルミネーションに飾られた江原ランドホテルの内部に設置されていて、朝 6 時まで営業している。

夜が賑わうとのことで、午後 8 時頃の時間帯を視察した。一階のロビーでパスポートのチェックを受け、入場チケットをもらって地下フロアにある入り口から入場する。外国人旅行者は入場料は無料。自国民の入場料は一回 9000 ウォン (約 900 円)。地元民は月一回しか入場できないとした制限があるが、住民票を移してしまえば、制限を受けない。来場者数の制限を設けていて、一度に入場できる人数は 7000 人とのこと。私たちが到着した



派手なイルミネーションの江原ランドホテル

時には、フロントに掲げてある電子ボードは現在約 3500 人が入場していることを示していた。カジノ施設の大きさは、一日目に視察したパラダイスカジノの数倍に感じた。

ゲームの種類は、6 割がスロットマシーン

で、4割が「ルーレット」「バカラ」「ポーカー」などのテーブルゲームという印象。テーブルゲームの方がレートが高く、「勝負」に熱が入るとのこと。ドリンクコーナーが各フロアにあり、ノンアルコールドリンクは飲み放題。レストランもあるが、料金は高く設定されており、単価はソウル市内の倍以上（例：味噌ラーメン 2500 円）だった。客層は、中年から年配者が多く、男性7：女性3のように感じた。



ホテルの地下にカジノ施設入り口がある

⑦江原ランド営業時間終了時の町の調査

朝5時半、江原ランドへ続く山道への入り口で、交通量を調査。山から絶え間なく車が下りてくる。昼間の数倍の交通量に感じた。6時頃、江原ランドからの送迎バスが駅周辺に到着。その後20分間隔でバスが往来していた。バスは満員に近く、降りてきた人の半数は駅、半数は町に入っていた。町のメイン通りでは、金貸しとみられる業者がカジノ帰りの人々に声をかけていた。サブク駅の待合室は、ソウル方面の始発電車を待つ人でいっぱいになっていた。駅の外でも金貸しの名刺広告をもった人物が声かけをしていて、何人か業者についていくのが見えた。



カジノ営業時間終了の時間帯



一晩中光る町のネオンと電子看板

報告のまとめ 政務活動員 柏木耕史

古谷やすひこ副団長の報告



韓国で唯一、自国民が利用できる、江原道(カンウォンド)のカジノ「カンウォンランド」に行きました。

カンウォンランドは、首都ソウルから特急列車で4時間近くかかる山の中にあります。カジノは朝6時まで営業しています。営業終了後、4千人近い客が山から下りてきます。

ふもとの町は、24時間営業の食堂や風俗営業店、ラブホテルが目立ちます。金貸し業者があちこちで客引きをしており、駅前では車の中から直接お金のやりとりをしている姿も目撃しました。

24時間営業の質屋も目立ちました。カジノに続く歩道には、質草となった車が100台以上置かれています。カジノに反対し、ギャンブル依存症患者を支援している現地の牧師によれば、この街では、カジノが開業してから自殺者が急増し、ほぼすべてのホテルで自殺者が出ているとのこと。借金がかさんで一家が離散する事例もあり、人口は減り続けているとの話でした。

このように、距離が近いことによる地元への負の影響は深刻で、開業当初は自由だったカジノへの入場は現在、一カ月に1回と厳しく制限されています。しかし、それでも、カジノ入場日に数カ月分もの収入を持って入場する人が後を絶たないと聞きました。

カジノをずっと前に解禁している韓国でさえ、自国民に向けてカジノを自由に解禁することには非常に抑制的で、大都市から遠く離れたところに例外的に許可しているだけです。日本のカジノ論議では、カジノとの距離の近さの問題がほとんど議論されていません。仮に中区の山下ふ頭にカジノをオープンさせれば、気軽に通える距離に暮らす市民は、中、西、南の各区など数十万人にも及びます。

ソウル市内で「カジノについて好きか嫌いか」と問うシールアンケートも行ってみました。年齢に関係なく、圧倒的に「カジノは嫌い」にシールを貼ってくれました。横浜でのカジノ誘致をストップさせるために全力を尽くしたいと思います。

北谷まり議員の報告

10月17日～19日、カジノ調査のために韓国へ行ってきました。まず、アジアの空の玄関である仁川（インチョン）国際空港から無料のリニアモノレールに乗って5分ほどで行ける、韓国最大級のカジノ、「パラダイスシティ」に行きました。韓国で初めての統合型リゾート（IR）で、2017年4月にオープン、約30,000㎡の敷地には、24時間営業の外国人専用カジノ、ホテル、商業施設、国際会議場などがあり、日本人スタッフも常駐しています。空港には「VIPの予約」のための専用カウンターがあり、空港内で見かけ



るカジノの宣伝とともに、「日本にカジノが導入されたら、羽田や成田もこんな風になるのかな」と思いました。航空機内で配布される機内誌にも、空港からソウルに行く特急電車の車内誌にも、カジノの広告記事があり、こうやって至るところでカジノの宣伝を見せつけられることに、恐ろしさを感じました。

モノレールを降りて進んでいくと、天井が高く広々とした大規模な商業施設がありました。しかし、どの店舗も開店休業の状態で、お客さんの姿は見当たりません。私たちは、ひたすら「カジノ」への道案内に沿って歩き、途中あやしげなライトで装飾されたところを通過すると、前衛芸術家・草間彌生氏の代表的立体作品「南瓜」が目に入りました。驚いたことにそこがカジノの入り口で、私たちはパスポートを提示してカジノに入りました。入場料は不要ですが、ゲームをやる場合は、メンバーズカードを作らなければなりません。カードを作ったら、カジノ内で使用できる無料クーポンなどがプレゼントされるようで、これがアリ地獄への第一歩かと思いました。カジノでは、ラフな服装の中国人と日本人のお客さんが、ギャンブルに熱中。ガラガラの商業施設とは正反対の熱気に唖然とするばかりでした。カジノには、ATMや外貨両替所、無料のドリンクコーナー、レストラン、休憩コーナーなどがあり、外に出る必要は全くありません。カジノに来たお客が、カジノの外に出ずにギャンブルし続けられる条件が整っています。

広報資料では、Art+tainment「アートで感性を刺激する」とStay+tainment「極上のひとときを過ごす」を打ち出し、ワンランク上のレジャー施設であることをアピールしています。しかし、どんなにきれいな言葉を使って“賭博”を隠そうとしても、その本質が変わるわけではありません。贅沢な料理や高級スパ、テーマパークやクラブ、芸術空間はカジノという賭博にお客を誘導するための装置にすぎないことが、視察ではっきりと確認できました。

韓国で唯一自国民を対象にしたカジノ、カンウォンランドには荒廃した町と悲惨な現実がありました。ソウルから電車で約4時間。到着した美しい山間の駅を出ると、真っ先に目に飛び込んできたのは、廃車を布で覆って作った派手な金貸しの広告。「スマホでお金貸します。延滞していても大丈夫」。駅を出て、カジノに反対しギャンブル依存症患者を支援している牧師さんに会うため、歩いた数分の間、不思議なことに道路は路上駐車の手で埋め尽くされていました。これらの車は質入れされたまま行き場がなくて放置されているもので、中にはソウルナンバーの個人タクシーもあるとのことでした。町の中は、質屋が軒を連ねていて、金貸しの広告、チラシが至る所にあります。中には、「ゴルフバックで金貸します」というのもありました。ゴルフをしないカンウォンランドに来たが、カジノにハマってゴルフバックを手放すという人も。カンウォンランドには、ゴルフ場、スキー場、プール、国際会議場などがあり、本来であれば山のリゾートとして楽しめるような設備が整備されています。カジノが営業していない朝の時間帯は、穏やかでのんびりとできそうな雰囲気でした。それとは逆にふもとの町は、カジノが閉まる朝6時ごろから、カジノ帰りの客で賑わいます。無料のシャトルバスで安宿に戻り朝食をとる人、ヤミ金業者と路上で話す人、駅で始発列車を待つ人、等々。しかし、朝の

賑わいは一瞬で終わり、昼12時からカジノが始まるため、また町は閑散としてしまいます。

カジノができてから、闇賭博や詐欺、強盗などの犯罪は3倍に増え、環境の悪化で学校は別の場所に移転。それに伴い子育て世帯も流出。その結果、7万人の人口は1万人に減り、まだ流出が続いているとのこと。依存症対策を行っている団体の事務局長は、「問題はカジノにある」ことを明言され、マイナスとプラスを考えたら、マイナスの方が大きいと話されていました。炭鉱が閉山するにあたって、何も産業が誘致できず、雇用の受け皿として導入されたカジノをやめるわけにはいかない現実、苦悩する姿を垣間見た思いでした。

私たちは、ふもとの町のホテルに泊まりましたが、質屋を併設しているホテルがあるだけでなく、どのホテルからも自殺者を出しているとの話を聞き、怖くて眠れない夜を過ごしました。自殺者が出ても公にされず、ひっそりと処理されるそうです。このような悲しいことは、あってはなりません。韓国で見てきたこの事実を多くの方に知っていただきたい。そして、「カジノ誘致の是非は市民が決める」住民投票実現のために、幅広い市民の皆さんと力を合わせてまいります。

発行：日本共産党横浜市議団

発効日：2019年11月11日

横浜市中区港町1－1 横浜市役所内 電話 045-671-3032 F A X 045-641-7100